

小松 謙 著

「四大奇書」の研究

汲古書院



小松 謙 著

「四大奇書」

常州大學圖書館
藏書章

研究

汲古書院



著者略歴

小松 謙 (こまつ けん)

1959年西宮市生まれ。

京都大學大学院文學研究科博士後期課程中退。

富山大學助教授を経て、京都府立大學教授。

文學博士。

著書

『中國歴史小説研究』『中國古典演劇研究』(ともに汲古書院)、

『『蕙解元西廂記諸宮調』研究』(赤松紀彦ほかとの共著 汲古書院)、

『圖解雜學 水滸傳』(松村昂ほかとの共著 ナツメ社)。

『「現實」の浮上——「せりふ」と「描寫」の中國文學史——』(汲古書院)

『元刊雜劇の研究——三奪槩・氣英布・西蜀夢・單刀會』

(赤松紀彦ほかとの共著 汲古書院)

「四大奇書」の研究

平成二十二年十一月十日 發行

著 者 小 松 謙

發 行 者 石 坂 叡 志

整 版 印 刷

中 日 台 整 版
モリ 日本 フォニックス
モト 印刷

發 行 所 汲 古 書 院

〒102-0072 東京都千代田區飯田橋二一五—四

電 話 〇三(三三六五) 九七六四

F A X 〇三(三三二二) 一八四五

ISBN978-4-7629-2885-7 C3097

Ken KOMATSU ©2010

KYUKO-SHOIN, Co., Ltd. Tokyo

序

「四大奇書」とは、『三國志演義』『水滸傳』『西遊記』『金瓶梅』の總稱である。この名稱自體は、清代前期の書坊が販賣促進用につけたキャッチフレーズにすぎまいが、この四篇をもつて明代白話小説の代表作、更にいえば中國長篇小説の最高峯と見なすことには、ほとんど異論はないであろう。清代に入ると多數の白話小説が制作されるようになるが、この四篇に比肩しうるものとしては、わずかに『紅樓夢』、あとはかろうじて『儒林外史』をあげうるにとどまろう。

また、『金瓶梅』以外の三篇は、演劇・語り物など藝能の世界における最も主要な素材供給源でもある。實際、今日上演されている演劇の中でも、三國・水滸・西遊記關係の演目は非常に大きな比重を占めている。

更に諸外國、特に日本に對する影響の大きさにも特筆すべきものがある。今日『三國志演義』『水滸傳』『西遊記』に取材した小説・漫畫・ゲーム・映畫・テレビ番組が量産されていることはいうまでもないが、それ以上に重要なのは、これらの小説が江戸時代の日本文學に與えた影響の大きさであろう。實際、『水滸傳』の受容なくしては讀本の發達はありえなかつた。⁽²⁾そして、歐米の「小説」概念を受容するにあたって、讀本がその基盤を形作つたとすれば、『水滸傳』は日本の近代文學成立にも大きな影響を及ぼしたことになる。

る。

このように、「四大奇書」は中國文學のなかでも指折りの重要な作品群である。従つて過去の研究も多く、その内容も成立史・テキスト研究・人物研究・作者に關する考證など、非常に多岐にわたる。筆者も、もとよりそのすべてに目を通したわけではない。ただ、四篇全體を文學史の中に位置づけようとする研究は必ずしも多くはないのではあるまいか。本書においては、白話が文字化され、白話文學が成立していく過程の中に「四大奇書」を位置づけることを試みてみたい。

まず歴史的事實が発生し、やがてそれが藝能の題材となつていく。第一に、なぜそれが藝能の題材として選ばれたのかが問われねばなるまい。なぜ三國であつて、南北朝ではないのか。物語は藝能の世界で育まれるが、口で語り、目で見、耳で聞くものである藝能は、當然のことながら文字とは無縁である。しかし、ある段階においてそれは文字に固定されるのか。そして、更なる一段の飛躍として、印刷に付される。本來文字と無縁であつたはずの藝能テキストが、なぜ印刷に付されるに至るのか。更に、印刷の世界においても物語は變容し續ける。その變容はなにゆゑに生じるのか。變容の結果、演劇・藝能の世界との間に乖離は生じるのか。また、これらのテキストの成立は、書記言語に影響を及ぼすのか。

これらは、いずれも中國社會の本質にまで關わる重要な問題である。そして、「四大奇書」こそは、これらの問題の焦點ともいふべき存在であつた。従つて、これらの問題について考えるためには、こうした視點を持つて「四大奇書」について考えることが不可欠である。しかも、マスメディアの影響力を抜きにして近代社會の成立を論じることができない點に鑑みれば、「四大奇書」の展開は、物語・言語・文字・印刷が絡まり合つて展開していく過程を示すモデル・ケースとして、近代社會の成立という普遍的な課題につ

いて考える一助ともなりうるものであらう。

まずは、「四大奇書」自体について論じる前提として、「四大奇書」を生み出す土壌となった明代における状況について考えてみたい。現存する「四大奇書」の諸刊本が刊行されるまでの時期において、白話文學の文字化はどのように進展したのか。「四大奇書」について議論を開始する前提として、まずその点について考察することは不可欠であらう。

注

(1) 「四大奇書」という名稱の成立過程については、浦安迪 (Andrew H. Plaks) 『明代小説四大奇書』(沈亨壽譯の中國語版による。中國和平出版社一九九三) 第一章「文人小説の歴史背景」が論じており、乾隆年間に芥子園刊本においてこの名稱が確立しているように思われるとする。

(2) 高島俊男『水滸傳と日本人』(大修館一九九一、後にちくま文庫二〇〇一)。

「四大奇書」の研究 目次

序

iii

第一部 明代に何が起ったのか

3

第一期 洪武～天順（一三六八～一四六四）…………… 8

第二期 成化～正徳（一四六五～一五二一）…………… 12

第三期 嘉靖（一五二二～一五六六）…………… 33

第二部 『三國志演義』

57

第一章 「三國」について——なぜこの時代が藝能の題材となるのか…………… 59

第二章 三國志物語の變容…………… 73

第三章 『三國志演義』の成立と展開——嘉靖本と葉逢春本を手がかりに…………… 99

第三部 『水滸傳』

139

序章	141
第一章 『水滸傳』 成立考——内容面からのアプローチ——	143
第二章 『水滸傳』 成立考——語彙とテクニカルチームからのアプローチ——	177
(本章は高野陽子との共著)	
第三章 『水滸傳』 はなぜ刊行されたのか	237
第四部 『西遊記』 と 『金瓶梅』	259
序章	261
第一章 『西遊記』 成立考	263
第二章 『金瓶梅』 成立と流布の背景	293
結び	325
あとがき	331
索引	1

「四大奇書」の研究

第一部 明代に何が起こったのか

白話文學の刊行はいつに始まるのか。現存する刊行物として最古のものは、おそらく南宋刊と推定される『大唐三藏取經詩話』であろう。また、刊本が残っていないものの、『董解元西廂記諸宮調』も金代にはすでに刊行されていたものと思われる。⁽¹⁾ただ、これらはいずれも後の時期にどのように繼承されたかが明らかではなく、いわば孤立した刊行物といふべきものである。刊本がほぼ完全な形で現存し、明代以降の白話文學作品に直結する性格を持ち、かつある程度刊行年代を定めうる刊行物という点からすると、白話文學刊行史の出発點に置くべきは、元末に刊行された『全相平話五種』（以下『全相平話』と略稱）と『元刊雜劇三十種』（以下『元刊雜劇』と略稱）であろう。

では、これらの書物はどのような目的で刊行されたのか。無論讀むためであろう。しかし、何のために讀むのか。今日の目から見れば、當然讀んで楽しむためという答えが期待されよう。しかし本當にそうなのか。當時娛樂のための讀書という習慣は存在したのか。

今でも中國語で「讀書」といえば、通常勉強のことをさす。また「讀書人」という言葉は、士大夫の別稱といつてよい。この場合の「讀書」も、今日の日本語でいう「讀書」とは異なり、儒教的な教養を持つことをさす。そして、印刷が本格的に行われるようになった宋代に刊行された書物は、現存するものについていえば、そのほとんどがいわゆる四部の書、具體的には「經部」つまり儒教經典と、「史部」つまり歴史・地理書、「集部」つまり詩文集、それに「子部」に屬する多様な書物、つまり思想・宗教書と農業・醫學・占卜などの實用書、それにやはり一種の實用書である類書にはば限られるといつてよい。これらは、まとめていえば士大夫から見て有益な書物、つまり固い書物と實用

書であり、娯樂的性格を持つものはほとんど含まれていない。もとより、その種の書物が残っていないということにすぎない可能性もある。『武林舊事』に「掌記」を賣る商賣が記録されているように、娯樂的な刊行物も皆無ではなかったかもしれない。ただ、「掌記」という名稱が暗示するように、それは本格的な書物ではなく、藝能に伴う簡単なパンフレットのなものだったのではないかと思われる。

つまり、宋金期までは、讀書とは勉強のためにするものであり、特に有益とも思えない娯樂目的の讀書という習慣はほとんどなかったものと思われる。元代に入っても、事情はそれほど變わらなかったであろう。ではなぜ『全相平話』と『元刊雜劇』が刊行されたのか。

おそらく『全相平話』と『元刊雜劇』との間で事情は異なるであろう。『全相平話』は、それほど教育水準が高くない識字者及びその周邊の人々を主たる讀者と想定して出版された啓蒙的歴史讀み物、一種の通俗的教養書であったものと思われる。⁽²⁾つまり、讀者は教養を身につけるための學習の具としてこれらの書物を用いた可能性が高いのである。一方『元刊雜劇』は、一部の例外を除いてト書きやセリフが非常に少ないか、もしくは皆無であり、戯曲として讀むことがほとんど想定されていないように思われることから考えて、曲辭を鑑賞するために刊行されたものと推定される。ということは、『元刊雜劇』の讀者は、讀み物としてではなく、詩詞や散曲を讀むのと同じ態度でこれらのテキストを受容することを期待されていたことになる。⁽³⁾

つまり刊行目的はそれぞれ學習と韻文鑑賞であり、娯樂目的で刊行されたものとは思えない。この點において、兩者はともに従來の刊行物の枠を出るものではなかった。しかし、これはあくまで刊行の目的であり、實際にそうした目的で受容されたとは限らない。實際、學習目的で讀み始めた書物が、その面白さゆえに娯樂目的へと轉じていくことは、その後の時代にも數多く認められる事態である。たとえば、江戸時代の日本人は「唐話」つまり中國語學習の

テキストとして『水滸傳』などの中國白話小説を使用したか、やがて彼らの多くはその面白さのとりこになり、やがて白話小説を模倣した讀本という新しいジャンルを生み出すに至る。中國でも同じことが起きていたのではないか。

『全相平話』の讀者たちは、當初の教養的學習という目的を離れて、娛樂書として樂しむことを始めたのではなからうか。これらの書物を制作するに當たり、おそらくは教養のない讀者でもあきずに讀み續けられるように、書坊が講釋の種本を利用したと思われることは、娛樂的讀書の成立にあずかつて力があつたに違いない。

一方、『元刊雜劇』の中には、「大字本」と括られる四種からなるグループが存在する。字が大きいことは、讀者層の教養の低さを反映することが多い。そして、大字本のうち「焚兒救母」「鐵拐李」の二種は、他の元刊本とは異なり、正末・正旦以外のセリフと詳細なト書きを含む。これは、曲辭の鑑賞というより、ストーリーの把握を重要視した結果ではなからうか。しかも、これらの雜劇は、内容的には庶民の世界を題材とし、言語的には典故を踏んだ表現をほとんど用いず白話を多用する。つまり、『元刊雜劇』の中でもこのグループは、教養の高くない人々が讀み物として受容したものだったのではないかと思われるのである。⁽⁴⁾

以上のように、おそらく元代末期には、目的としてはあくまで從來の出版の枠内で刊行された出版物が、本來の意圖とは異なる意識を持つて受容されつつあつたように思われる。明代に入ると、書坊はより自覺的にこうした方向を推し進め、それに對應して新たな讀者層が廣がつていったのであらう。こうした狀況が、「四大奇書」を生む土壤となつたに違いない。では、明代には具體的にどのような事態が進行したのであらうか。

明代に何が起きたのか。ここでは、便宜上明代を五つの時期に分けて論じることにした。

第一期 洪武～天順（一三六八～一四六四）「前期」と略稱

第二期 成化（正徳）（一四六五—一五二一）「中期」と略稱

第三期 嘉靖（一五二一—一五六六）「嘉靖期」と略稱

第四期 隆慶・萬曆（一五六七—一六二〇）「萬曆期」と略稱

第五期 天啓・崇禎（一六二一—一六四四）「末期」と略稱

必ずしも皇帝の治世の切れ目が時代の切れ目と一致するとは限らないが、この場合にはこうした区分は有効であろうと思われる。前期と中期をそれぞれ一つの区分とするのに對して、後期を三つに細分するのは、嘉靖期以降出版が急激な進展を遂げ、しかも時期を追って大きく様相を變えていくからである。

では、以下嘉靖期までの展開を、時代を追って見ていくことにしよう。

第一期 洪武—天順（一三六八—一四六四）

この時期は、通常文化的には停滯期と見なされている。事實、吳中四才子など元の名残ともいふべき人々を別にすれば、詩文においてすぐれた業績を残した例は少なく、また思想面においても、いわゆる「永樂の四大全」のような編集ものが作られ、そのため政府公認の朱子學以外の展開が抑制されたといわれる。ただ、「四大全」の編纂が思想統制の一環であつたことは事實ではあるが、それが明代文化が持つ獨特の性格を生み出す要因となつたことを見逃してはなるまい。

「四大全」が科擧の基準として確定されたことにより、受験生は多様な考え方を學ぶ必要がなくなつた。その結果、受験生の思想は確かに單純化されたであろうが、違った側面から見れば、受験生は多様な書物を讀み、多様な考え方は

に頭を慣らす必要はなくなつた。つまり、多くの書物を読み、廣い教養を身につける必要がなくなつたのである。これは、科擧受験者を擴大する上で非常に大きな効果を持つ措置であつた。受験者は基本的には「四大全」に精通すればよいのであつて、多くの書物を読む必要はない。このことは、經濟的にも受験を容易にしたに違いない。従來は、多くの書物を購入することのできる富裕な家や、豊かな藏書を持つ知識人の家の人間でなければ十分な受験準備は困難であつたものが、今や限られた數の書物を入手し、その範圍の知識だけを増やすことによつて、合格が可能になつたのである。當然、合格者の知識レベルは低くなり、思想の自由な發展は阻害される。しかし、それを補つてあまりあるといつてもいいかもしれない効果がここから生じた。宋元まではかなり限定された階級であつた士大夫層が流動化し、低い層の人間も士大夫に成り上がるチャンスが生まれたのである。

こうして明代は、中國史上でも特に烈しい競争社會になつた。そしてそこからいわゆる明代士大夫の庶民性が生じ、それは後述するように白話文學の發達を促し、また出版の發展の要因ともなつた。陽明學の誕生もこの動きと深く關わる一面を持つていよう。つまり明代前期の文化的停滯は、中期から後期に生じる爆發的展開の助走ともいふべき性格を持つていたのである。

とはいへ、この時期における出版が低調であつたことは否定できない。そうした中で、白話文學の重要な出版物が二種類刊行されている。そしてその性格は、やはり後期に發生する爆發的展開への助走と呼ぶべきものであつた。『周憲王樂府』と『嬌紅記』である。

この二種の戯曲(ともに雜劇)刊本については、別に論じたことがあるため、⁽⁵⁾ここでは簡単に述べるにとどめるが、兩者は全く對照的な性格を持つ。『周憲王樂府』が、作者周憲王朱有燉自身の手により、周王府から刊行されたのに對し、『嬌紅記』は南京の積德堂なる書坊の刊行物である。そして、前者が正確な用字により、読みやすい端正な文字で